

略奪と陵辱

——性・所有・共同体I——

足立信彦

だが女性たちは優しく諭すように
善き振る舞いを導き
燃えさかる争いの炎を消し
いがみあう敵同士に
愛をこめた抱擁を教える
そして永遠に交わらぬものをひとつにする
(フリードリヒ・シラー)

誰でも一度はベートーベンの第九交響曲を聴いたことがあるだろう。日本ではこの交響曲の演奏は年末の行事として定着している。だが、第四楽章の合唱の歌詞に次のような一節が含まれていることを知る人は少ない。

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund!
ひとりの友の友となるという
大きな企てに成功した者、
優しい女を獲得した者は、
その歡びを共にしよう。
そうだ、たとえひとつでもこの地上で
或る魂を自分のものだと言える者は！

そして、それをなし得なかった者は
泣きながらこの同盟から立ち去るがよい！

「ひとりの友の友となるという大きな企て」という歌詞は人間同士の連帯を歌い上げるシラーらしい理想主義の表現である（「すべての人間が兄弟となる（alle Menschen werden Brüder）」）。しかし、この連帯の絆に女性が含まれることはない。そこに加わることができる条件が「優しい女を獲得する」こととされるからだ。それゆえ、次の「たとえひとつでもこの地上で或る魂を自分のものだと言える者」という歌詞に含まれる「魂（Seele）」という単語が女性名詞であり「者（wer）」と訳した単語が男性扱いであるということは、単なる文法的符合以上のものに思える。事実、シラーはある論文で女性を「美しい魂（eine schöne Seele）」と呼んでいる。¹⁾ ここで歌い上げられた人間の連帯とは、女を獲得することに成功した男たちのみによって結成される同盟のことなのだ。女を獲得することに失敗した男は「泣きながら」この同盟を去らねばならない。

「ひとりの友の友となる」こと、すなわち男性同士の同盟への参加に必要なのは「女性の所有」である。それはなぜか。

I サビニの娘たちの略奪

近代のドイツからいったんはるか昔に遡り、ローマ帝国初期建国史に含まれる「サビニ族の娘たちの略奪」というエピソードを取り上げることにしよう。

ローマの歴史家リウィウスによれば、ローマ市の建設者ロムルス（Romulus）の時代——それは歴史というよりもむしろ伝説に属する時代なのだが——ローマ人は諸部族の逃亡者からなる、寄せ集めの小さな戦士集団に過ぎなかった。この男たちは周辺の諸部族と争いながら武力によって勢力を拡大していく。しかし、彼らには重要な基盤が欠けていた。それなしには決して集団の永続的維持がかなわぬもの、すなわち女性である。リウィウスは次のように書いている。

「ローマは強大になり、近隣のどの国と戦ってもひけをとらないくらいになったが、しかし、女がいなければ、その繁栄も一代かぎりとならざるをえない。国のなかで子孫が誕生する可能性はなかったし、近隣諸国との縁組みも望み薄であった。」²⁾

そこで建国者ロムルスは一計を案じ、盛大な祭りを開催することにして、周辺諸部族を招待した。そこにサビニ族の男たちは妻や娘を伴いこぞってやって来た。祭りが最高潮に達したとき、かねての計画通り、ローマの男たちがサビニ族の娘たちに襲いかかった。かれらはたまたま出会ったサビニの娘を手当たり次第に連れ帰り自分のものにした。娘

たちは絶望して嘆き悲しみ、両親たちは激昂して怒り狂った。ロムルスは娘たちを懐柔、説得しようと試みて次のように言ったとされる。

「正式な結婚さえすれば、すべての富と市民身分を共有することができ、人間にとってこの上なく大切な子どもが授かることにもなる。だから、怒りを鎮めてもらいたい。そして偶然があなたの体を引き渡した相手に、心もまた引き渡してほしい。罪から親切が芽生えることはよくある。男たちはそれぞれ心を遣い、夫の役割を果たすうちに、ますます良い夫となり、両親と祖国に対するあなたたちの思いを満たしてくれるだろう——。」³⁾

たとえロムルスの試みが功を奏したとしても、両親たちの怒りが収まるはずはなく、ローマ人とサビニ人の間の対立は武力衝突にまで至った。そして、いよいよ決戦の火蓋が切られようとする緊張のさなか、対峙する両者の間に略奪されたサビニの娘たちが突如身を投げ出し、双方に和解を乞い求めるのである。リウィウスによればそれは次のようにしてである。

「その時、争いの原因、略奪されたサビニの女たちが、髪ふり乱し、着衣の乱れもそのままに、敢然と槍の飛び交う中に身を投じた。女たちの恐怖心を打ち負かしたのは、あまりの不幸の大きさだった。女たちは、敵対する両軍の間に割って入って引き離し、怒りを鎮める。そして一方の父親たち、他方の夫たちに向かって、舅と婿とのあいだで不敬の血を流さないでほしい、また、一方にとっては孫となり、一方にとっては子となるべき、両者の血を引く子どもたちを肉親殺しの罪で穢さないでほしいと懇願した。〈もし、あなた方が互いの縁戚を嫌い、この結婚に反対ならば、怒りは私たちにこそ向けてください。戦争の原因は私たちであり、私たちのために夫と親が傷つき命を落とすのです。あなた方のどちらを亡くすにせよ、私たちは寡婦か、みなしごととして生きねばなりません。そうなるくらいなら、死んだ方がましです〉」⁴⁾

サビニの娘たちの言葉が語られるや否や、戦場には静寂が訪れ再び戦端が開かれることはなかった。そして、ふたつの部族の間には講和が結ばれることになったのである。

「やがて指揮官たちが盟約を結ぶために歩み出た。それは単なる講和にとどまらず、二つの民を一つにする取り決めであった。」⁵⁾

略奪された娘たちの英雄的行為は、歴史家リウィウスと詩人オウィディウス⁶⁾の筆に

よって知られるところになり、その後多くの絵画に題材を提供することにもなった。なかでも有名なのは現在ルーブル美術館で見ることのできるダーヴィッドの絵筆によるものであろう。

このエピソードが多くの画家にインスピレーションを与え、画題として好まれたのも不思議なことではない。なんとといっても、これは「ローマ人」というものが部族として誕生するというローマ史における決定的瞬間なのである。とはいえ、「ローマ人」の歴史的、いや神話的な起源を伝えているからという理由だけでは多くの芸術家の心を揺さぶることはなかつただろう。このエピソードが印象的なのは、そこで語られるサビニの娘たちの心情と自己犠牲のゆえである。

なぜ娘たちはそのような行動に出たのだろうか。なぜ娘たちは、奪われ、犯され、望まぬ子を出産したにもかかわらず、戦いの只中に身を投げ出すような真似をしたのだろうか。

その答えは、リウィウスが娘たちの口を借りて語らせた言葉の中に見い出されるのだろうか。それによれば、娘たちを駆り立てたのは、妻として、母として、娘として家族、肉親を思い遣る止むに止まれぬ気持ちだったということになる。

だが、もしそうであるのならば、彼女たちの次の言葉はどういう意味だろうか。「怒りは私たちにこそ向けてください。」 たしかに、その理由として彼女たちが「戦争の原因」



であり、彼女たちのために「夫と親が傷つき命を落とす」のであるから、と言われていた。しかし、それは納得のいくものだろうか。そもそも彼女たちは略奪され暴行されたのである。なぜ彼女たちに怒りが向けられなければならないのか。

ここでひとつ確認しておきたい。私たちが依拠しているリウィウスのテキストは歴史書とはいえ、事実を可能な限り正確かつ忠実に記述伝達しようとするものではない。このテキストはむしろ、「歴史」を造り出そうとするものである。それは、ただリウィウスに現代的な意味での歴史学的方法論が欠けていたということの意味するだけではない。より重要なのは、リウィウスがローマ人の誕生に関するある見解を歴史として定着させようとしていたということである。このテキストのどこかに理解困難な部分があるとなれば、その原因はリウィウスが造り出そうとしていた「歴史」そのものの中にある。

そこでこれからこのテキストを、著者であるリウィウスの意図に逆らって読んでみようと思う。リウィウスが書いたテキストをいわばリウィウス自身の読み方に抗わせるのである。

リウィウスの『ローマ建国以来の歴史 *Ab urbe condita libri*』の第一巻、サビニの娘たちの略奪が語られる部分より前に、ロムルスがヘラクレス崇拜の儀礼を市に導入したという記述がある。それに関連して、このギリシアの英雄の事蹟が語られるのだが、それは彼が牧人カクスによって盗まれた牛の群れを取り戻しに行き、カクスが抵抗したため殴り殺したというものである。⁷⁾ ヘラクレスはこのようにしてカクスによる略奪に対し彼の所有物を守ったのだ。しかし、ギリシア神話によれば、ヘラクレスがここで「取り戻した」とされる牛の群れは、実はかつて三つの頭をもった巨人ゲリュオンの所有物であった。ヘラクレスはこの怪物を殺し、その牛を奪ったのである。このような前史を踏まえればヘラクレスの「功業」はまったく別の様相を帯びることになる。

ヘラクレスは正当な権利の行使として牛の群れを奪い返したのではなく、単に剥き出しの暴力をもって、羊飼いかクスの所有に帰していた牛を奪い返したのである。いや、「奪い返した」ではなく単に「奪った」と言うべきだろう。「奪い返す」とは所有に関する正当な権利の観念があって初めて成り立つ言い方なのだから。ゲリュオンの牛を奪ったヘラクレスと、ヘラクレスの牛を奪ったカクスの違いは、前者がそれに成功し、後者が失敗したということに尽きる。正当性に関しては一片の違いもない。そして略奪に成功するということ、手に入れたもの、現に所有しているものを力を以て守り抜くということ、これこそがまさに「功業」であり「勳(いさおし)」である。ヘラクレスが英雄であるのはそれに成功したからであり、ゲリュオンが怪物であり、カクスが愚かな牧人であるのはそれに失敗したからに過ぎない。力がないということは端的に悪なのである。

所有物を力、剥き出しの力をもって守り抜くこと、それがヘラクレスが生き、体現した世界の原理である。そこでは、所有関係は暴力によって制御される。暴力のみが所有

の秩序を生み出し、暴力によって初めて所有の秩序が確定されるがゆえに、暴力は賛美され崇拜される。そこにはいまだ権利も法も存在しない。

ヘラクレスの挿話を背景として考えると、サビニの娘たちの物語は新たな意味を帯びてくるだろう。

だがそれを考える前にいくつか確認しておきたいことがある。

1. 人類のどの文化においても、女性を外部集団から獲得することが集団の形成維持にとって重大であることは言うまでもない。サビニの娘たちの物語はローマの外婚制の起源について語っているのかも知れない。「父系体系では、女性と夫の絆と、女性と兄弟の絆のどちらが相対的に強いかということは、つねに重要な問題である。女性がその(生まれた)リネージに非常に強い絆を残して、父親や兄弟が彼女に対して強い法的権利をとどめている(中略)という体系もある。逆に、生まれたリネージに対する女性の絆が実質的には断ち切れ、女性は夫のリネージに強く同化させられるという体系もある。この後者が最も極端なかたちをとったのは、初期ローマ人の場合である。つまり、女性は結婚すると、その家族とリネージの祖先祭祀から儀礼的には切り離され、夫と義理の父親の家族へ組み込まれた。(法的擬制により、彼女は夫の祖先を背負いこみさえた。)そして、夫は彼女に対して、以前は彼女の父親のものだった一連の法的権利を同じように行使したのである。」⁸⁾ 「こうした社会(=部族社会)では、婚姻の特徴は、それが団体間の契約だという点にある。契約であるから、ある団体の成員は譲渡されて他の団体の所に住むようになり、そのために労働力は失なわれざるをえない。(中略)婚姻によって成員を失なう方の団体は、その婚姻で生まれた子供に対する権利もまた相手側に譲り渡す。それゆえ婚姻というのは、労働力や生殖能力などに関する権利の譲渡だと考えればよいであろう。そして、婚姻は一つの契約であるから、こうした権利の譲渡は物的・象徴的な補償で埋めあわされるのがふつうである。」⁹⁾

婚姻が集団間で生じる女性に対する権利の譲渡とその補償行為であるならば、婚姻とは一種の交換である。女性は交換の対象として重要なのだ。では、なぜ女性を「交換」することが可能なのかと言えば、それはみづからが女性を所有しているからだ。女性を「所有」していなくては、交換に参加することはできない。したがって、ヘラクレスによる牛の強奪とローマ人によるサビニの娘たちの略奪は同列の出来事である。ローマ人たちは女性たちに対し、ヘラクレスが牛の群れに対してしたように行動した。すなわち、かれらは女性を「所有」していないがゆえに交換に参加することができず(「近隣諸国との縁組みも望み薄であった」)、それゆえ剥き出しの暴力に訴えたのである。

2. 「サビニの娘たちの略奪」を英語では‘the rape of sabine women’という。このレイプ

(rape) という言葉はふたつの意味を持っている。すなわち略奪と強姦である。この言葉がこのふたつの意味を持つのは偶然ではない。

フランスの歴史家 ジョルジュ・ヴィガレロ (Georges Vigarello) は著書『強姦の歴史』の中で、アンシャン・レジーム下のフランスにおいて強姦とは所有権の侵害であったことを指摘している。¹⁰⁾ 法廷で関心が払われたのはもっぱら所有者 (両親、夫もしくは後見人) の被った不利益であって、犠牲者たる女性の苦しみに関心が集まることはなかった。アンシャン・レジームにおいて強姦とは略奪だったのである。ここでフランス旧体制下の例を古代ローマに結びつけるのは強引に過ぎると見えるかも知れないが、rape という単語がラテン語の ‘rapio (rapere) (強奪する)’ に由来することを知ればそれほどの牽強附会とも思われまいだろう。

3. そもそも略奪とは何か。それはあるものの所有者が対価を伴わずに変更されることである。サビニの娘たちの略奪は、その意味で、サビニの娘たちの父親や男兄弟の所有権を毀損したことになる。サビニの娘たちは、対価の支払いも補償もなく暴力によってローマ人に奪われた。それならば、サビニの男たちの側もまた暴力に訴えるのはいわば自然な流れである。ヘラクレスが手本を示しているように、暴力によって奪われたものは暴力をもって奪い返さなければならない。

人類史において、女性の略奪は男たちの間に数多くの戦争を惹き起こしてきた。そのひとつがトロイ戦争であり、トロイの王子パリスがスパルタ王の後ヘレネを奪ってトロイに連れ帰ったのがこの戦争の原因であった。神話によればこの戦争を生き延びたトロイ人アエネイスがローマ人の父祖となったとされる。女性の略奪がしばしば戦争の原因となるのは、それに男たちの名誉と恥辱がかかっているからである。古代的な価値観の中では男らしさとは、所有物、つまり土地と女性を略奪者から守る力の中にある。

4. 女性が略奪される場合、それはただの誘拐ではなく強姦されることを意味する。したがって、娘たちの略奪は家畜の略奪以上に所有者にとっての痛手となる。略奪者の手から奪い返された娘たちは、処女性を失ってしまったがためにもとのままの価値を保っていることはできない。もはや有利な交換条件を満たすことができないのだ。したがって、娘たちは貴重な財産、交換資源としてあらゆる危険と誘惑から保護されねばならない。

現代の例であるが、アフガニスタンのパシュトゥン人を研究している文化人類学者の松井健は、娘たちの父親や男兄弟がその処女性を守るためにいかに腐心しているかを指摘している。¹¹⁾ 彼によれば、この国で男性の第一の義務とは、三種類の財産、つまり金と土地と女性を守ることである。そのために男性たちの間では争いと戦いが絶えない。男たちの名誉はそれらの財産を守ることができるかどうかにかかっている。それゆえ、

この国の男たちは娘たちが誰かに誘惑されるのではないかと常に恐れ、その猜疑心は妄執の域にまで達する。娘たちは時に誘惑に屈したという嫌疑をかけられただけで、それどころか男と言葉を交わただけで殺されてしまうことがある。

要するに略奪とは、その対象が物や動物であろうが女性であろうが、それを所有していると信じる男性にとっては耐え難い恥辱なのである。略奪によって、男性たちはおのれの無力を思い知らされ、男性としての価値を喪失したと感ずるのだ。

サビニの娘たちは戦場に身を躍らせ、その身も世もあらぬ懇願、叫びによって戦端が開かれることを防いだ。つまり、所有をめぐる争いに決着がつくことを妨げた。争いの決着がつかず、勝者が存在せず敗者が生まれることもない。つまり、双方の男性の名誉が傷つくことがなかったという事実が、ふたつの部族が融合してひとつに成ることを可能にしたのである。英雄的な娘たちの行為が標しづけているのは、男たちが所有をめぐる凄惨な戦いから解放された瞬間である。娘たちはローマ人に生物学的な永続性、つまり子孫を贈っただけではなく、同時に、ひとつの法を与えたのである。その法のおかげで、男たちはもはや女性や他の所有物をめぐり果てしのない争いを繰り広げなくてもすむようになった。この時以降、所有関係は法によって制御されるようになる。つまり、これは血縁関係に基づくひとつの民族が誕生した瞬間であるばかりでなく、法的体制に基礎をおく国家というものが芽吹いた瞬間でもある。嘆き悲しむ娘たちを説得しようとしてロムルスが発したされる言葉は、先史時代の万人の万人に対する闘争状態が法による支配に移行したことを証言している。「(略奪された娘たちは) 正式な結婚さえすれば、すべての富と市民身分を共有することができ、人間にとってこの上なく大切な子どもが授かることにもなる。」ただし真の時間的、論理的前後関係は逆である。正式な結婚も保証された所有も市民権も、すべては法的国家の創建以後、つまり女性たちの介入があって初めて可能になった。ロムルスがサビニの娘たちに約束するもの、それをローマ人に贈ったのはまさに彼女たちなのだ。

リウィウスがわれわれに伝える歴史は、国家の成立に関する男性の観点である。サビニの娘たちの略奪と彼女たちの英雄的行為から男性たちがいかなる利益を得たかははっきりしている。暴力が支配するヘラクレスの世界から、所有が平和的に制御される法的世界への移行が果たされたのだ。そして、この物語は、法の成立に女性たちが一定の役割を果たしたことを示唆している。

だが、それはいかなる役割なのか。女性たちの身に何が起こったのか。彼女たちはもはや獲得され、略奪され、そして奪い返されるような何かではなく、法的に制御された所有関係の中に存在する何かになった。女性たちの交換は今や暴力によってではなく、法に基づいておこなわれる。彼女たちにとってそれはどういう違いを意味するのだろうか

か。

「怒りは私たちにこそ向けてください。戦争の原因は私たちであり、私たちのために夫と親が傷つき命を落とすのです」というサビニの娘たちの言葉を読み解くことは難しい。

この言葉を男が読むとしたらそれは次のような意味に解釈されるだろう。〈女性たちがわれわれ男たちの欲望の対象であることをみずからの罪として認め、我々の間に争いをもたらした戦争を引き起こした原因であると名乗り出たのだから、戦争はわれわれ男の責任ではない。女性たちが戦争という罪を引き受けた。それゆえわれわれは互いに殺し合うことを止めて、矛を収め同盟を結ぶことができる。〉これこそ、みずからを犠牲にして男を破滅から救済する乙女というロマン派的モチーフの源泉ともいべき読解であろう。¹²⁾

しかし、私はここでサビニの娘たちは「本当は」どう言ったのか、という問いをたてたい。もちろんこの神話的過去についてその事実、実態を明らかにすることができると思っているわけではない。だがそれでもこの「本当は」という言葉は無意味ではない。少なくともそれは、もしサビニの娘たちの言葉が女性の立場から記録されたとすれば、それはリウィウスが伝えるのとはまったく違うものであっただろうという確信に基づいている。

もし所有物が語ることができれば、その言葉はどのようなものであろうか。なにゆえ所有物が自分をめぐる争いのさなか、その争いを止めるために声を上げなければならないのか。サビニの娘たちの物語は、法と国家の起源が、所有を確定し保障するために成立した最初の秩序のなかにあることを示唆している。だが、もしこの物語が所有物の視点から書き換えられたら、それはわれわれに何を物語るだろうか。たしかに牛は言葉を発することはできない、しかし女性たちはできる。ただ、彼女たちが発した言葉は後世に伝えられることがなかった。

十八世紀ドイツの哲学者ヘルダーは次のように言った。

「世界中どこでも女というものは欲望を掻きたてる最初の不和のリング (Zankapfel) であり、その本性からして人類創造という建築物に最初にはめ込まれたもろい礎石であった。私が思うに、ひとりの男ないしひとつの民族の本質的な性格が分かるのは女の扱い方において他にはない。(中略) たいていの民族において女は奴隷であったが、君たち (= ドイツ人) の母は相談相手となる友であったし、そのなかでも気高い女性は皆いまなおそうなのである。」¹³⁾

女性は不和の種である。女性たちをどう扱うかを見ればある国民の文明度を測ることができる。そうかもしれない。だがその時、女性たちにとって法、文明、国家とは何を意

味するのか。

ひとつの物語は多様な解釈を生む。解釈の争いは物語をめぐる立場の争いである。物語の中に隠されたもうひとつの立場から物語を解釈する可能性について、男たちの物語から女たちの物語を再構成する可能性についてわれわれは考えるべきだろう。

II ルクレティアの陵辱



この絵はケンブリッジ大学フィッツウィリアム博物館 (The Fitzwilliam Museum) に所蔵されているチチアンの『タークウィンとルクレティア Tarquin and Lucretia』(1571) である。ローマの王タルクィニウス・スペルプスの息子が貴族タルクィニウス・コラチヌスの妻ルクレティアに横恋慕し、夫の不在中に彼女の寝室に押し入って抜き身の短剣をかざし乱暴を働こうとしている。この屈辱の一夜の後、ルクレティアは父と夫を呼び寄せて何が起こったかを告げ、王の息子にその非道なおこないを償わせると男たちに誓わせた後、彼らの眼前で自死を遂げる。このためルクレティアはローマにおける貞女烈婦の鑑として称えられることとなった。

だが、「ルクレティアの陵辱 The Rape of Lucretia」として知られるこのエピソードの意味はそれだけにとどまらない。史書は、この事件をきっかけにして起こった叛乱がロー

マの王政を倒し共和制の創設をうながしたと語る。ローマ国制史における王制から共和制への転換を象徴するがゆえに、この物語もまた多くの芸術家の想像力を刺激してきた。陵辱の場面だけでなく、ルクレティアが短剣で自ら胸を刺して果てる場面や、残された父と夫そして友人のブルトゥスが彼女の遺体を前にして復讐を誓う場面が多く画家によって描かれてきた。絵画ばかりではない。イギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテンは彼女の悲劇をオペラに仕立てている。

むろんリウィウスはルクレティアの陵辱のみが革命を引き起こしたとは言っていない。彼はタルクィニウスの王国が崩壊に至るさまざまな原因を指摘している。要約すれば、それは以下のようになる。

善良にして温和なセルウィウス・トゥリウスによる統治は四十四年間で終わった。女婿ルキウス・タルクィニウス・スペルプス（スペルプスは渾名で「傲慢」の意）が王を殺し王権を篡奪したからである。彼は人民の議決によって王に推戴されたわけではなく元老院の承認も得ていない、つまり正統性をもたない王であった。¹⁴⁾ 正統性を持たない王は富と人気に権力の源泉を求める。彼は戦上手であり、他の諸都市を陰謀術数によって攻略しては略奪した富をローマにもち帰った。また、有力者たちを処刑もしくは暗殺しその財産を没収、奪った金でユピテル神殿の建築という大事業を始めた。金をばらまくだけでなく、宗教的権威による王権の裏付けを図ったのである。だが、神殿建築のために過大な労役を課された市民たちの不満は高まり、金ではなだめられない水準にまで至っていた。これが、ルクレティアの陵辱が起こる前の情勢である。

そして、国制が転換する象徴的時点としてルクレティアの陵辱をめぐる物語が語られる。なぜそのような物語が必要なのだろうか。ここで同様に大きな体制転換を象徴する別の物語と比較してみよう。フランス革命前夜、王権が失墜する瞬間をドイツの作家クライストは次のように描き出している。

時は1789年、6月20日の有名な「球戯場の誓い」の後、23日に国王は国民議会の解散を命じた。しかし、諸身分の代表者はそのまま議場に残り、そのため儀典長がやってきて国王の命令を聞いたのかと尋ねた。

「ミラボーは〈たしかにわれわれは王の命令を承りました〉と答えた。この穏やかな出だしの時点では彼がまだ結びの言葉となる「銃剣」を思いついていなかったことは確かだと思われる。〈たしかに、わが君よ〉と彼は繰り返した〈われわれは命令を承りました〉。自分が何を言うつもりか彼がまだまったく分かっていなかったことは明らかだ。〈しかしなにゆえあなたは〉と彼は続け、そしてその時突然彼の頭に途方も無い考えが湧き上った〈われわれにここで命令するのですか。われわれは国民の代表者なのです〉。——これこそ彼が必要としていたものだった。〈命令を下すのは国民であり、国民はいかなる命令も受けません〉。——そしてすぐさまこの大胆さは

頂点へと達する。〈はっきり言いましょう〉——この時彼は初めて、魂のなかで以前から渦巻いていた反抗心を言い表す言葉を見いだした〈あなたの王に伝えてください、われわれはこの場を去るつもりはない、銃剣の力をもって排除されぬ限りと〉。——しかるのち彼は満足気に椅子に腰をおろした。」¹⁵⁾

言うまでもなく旧体制(アンシャン・レジーム)が崩壊に至った原因は無数にある。クライストが示そうとしているのは、それらの原因によって徐々に衰えていった王権がある瞬間に機能しなくなるいわばゼロ地点である。ルクレティアの自死に続く復讐の誓いの場面もまた、王権がその最後の権威を喪失する瞬間を示している。

だが、ある女性の陵辱が国制の転換につながるとはいったいどういうことなのだろうか。王制から共和制へとローマの政体に変化する経緯を語るこの物語、いわば革命の正当化の語りは、なぜミラボーのエピソードのように直接的ではなく、女が犯されるといふ事件を起点としなければならないのか。ひとりの女性が強姦されるといふことはもちろんそれだけで十分に深刻な事態である。それでも、女性の陵辱という出来事がいかなる仕組みを通して政治的事件に変換されるのかは謎である。ひとりの女性の身に起きた悲劇が体制転換の端緒とされる歴史の構図はどのような意味を秘めているのだろうか。

そして、被害者であるルクレティアはなぜみずから死を選ぶ必要があるのか。彼女が革命に捧げられた犠牲であることは疑いない。彼女の自己犠牲と復讐を望む意思は革命にとってどんな意味をもつのか。サビニの娘たちの場合と同じく、ルクレティアの自己犠牲と発言が体制転換の契機とされているが、なぜ女性の、犠牲者たる女性の意思表示が体制転換のために必要なのか。

ひとまず、ルクレティアの陵辱から革命にいたる経緯を詳しく見てみることにしよう。

事の発端は、ルトゥリ人の町アルデアを攻略中の陣中で、王の息子セクストゥス・タルクィニウスが催した宴会の席上、妻の自慢比べがおこなわれたことにある。タルクィニウス・コラティヌスは自分の妻ルクレティアが一番であると言い放つ。そこで酔った若者たちはコラティヌスの家に赴き、その妻の姿を眼にする。彼女は「夜更けにもかかわらず、家の広間に座り、奴隷女の夜なべ仕事にまじって糸を紡いでいた」。そして「そのときセクストゥス・タルクィニウスの心には、力づくでルクレティアを犯したいという欲望がめばえた。美しさだけではなく、折り紙付きの貞節に心そそられたのである。」¹⁶⁾

ここでは、王の息子の心に芽生えた悪しき欲望とルクレティアの貞節という倫理的対比が提示される。しかし共和制への移行を正当化する政治的論理はまだ存在しない。¹⁷⁾ それゆえ、まずはルクレティアのタルクィニウスに対する優位が道徳的なものとして示される。

数日後セクストゥス・タルクィニウスはひとりでルクレティアの家へ向かう。

「彼は魂胆を誰にも気づかれないまま丁重に迎え入れられ、食事をしたのち、客用の寝室に通された。家の者たちが寝静まったところを見はからい、安全を確かめると、情欲に駆られたこの男は、剣を抜き、ルクレティアが眠っている部屋に忍び込んだ。そして左手でルクレティアの胸を押さえ、こう告げた。〈静かにしろ、ルクレティア。私は、セクストゥス・タルクィニウスだ。手には剣を持っている。声を立てれば、命がないぞ。〉 目が覚めたルクレティアは背筋が凍った。助けを呼ぶこともできず、目の前にはただ死が迫っていた。この状況でタルクィニウスは恋慕の情を打ち明けたのである。哀願したかと思えば、口説きと脅しをない交ぜにし、ありとあらゆる手だてを尽くしてルクレティアの女心に訴えかけた。しかし頑なに拒まれ、死の恐怖をちらつかせてもなびかぬと見て取ると、彼は恐怖に加えて汚辱の脅しに訴えた —— お前の死体のわきに奴隷の裸の死体を置いてやる。そうすれば、穢らわしい密通のさなかに殺されたと噂されることになるだろう ——。この脅しによって、彼の情欲は堅い貞節を打ち破り勝利者となった。タルクィニウスは女の誉れをずたずたにしてから意気揚々と引き揚げた。」¹⁸⁾

邪な欲望に取り憑かれた王の息子とあくまでも貞操を守ろうとするルクレティア。興味深いのは、セクストゥス・タルクィニウスを悪とするためには性の介入が必要だということだ。この事件以前、タルクィニウス王は政治的悪ではあったとしても、それはせいぜい王を替える理由にしかならない。悪しき王はいくらでもいるのだから、それは王制という制度内の変化をもたらす理由にはなっても、体制それ自体を変える根拠にはならない。革命という次元の異なる変化のためには、政治内部の正義ではなく次元の違う正義に訴える必要があった。

性(的欲望)とは政治的秩序、あるいは秩序一般にとって何を意味しているのだろうか。それは既存の秩序を踏み越え、破壊し、新しい秩序を生み出す原動力となる。男たちが性的欲望に導かれてrape(略奪/強姦)をおこない、女がその罪を自分に引き受けることによって、新しい秩序が到来する。男たちの物語の中で、性的欲望の発露たるrapeは常に何か別のものが到来することの徴とされてきた。新しい秩序は女によって明かされる。男たちは自分たちだけでその秩序を創り出したり、それを証明したりすることができないのだ。

屈辱に満ちた一夜が明けた後、ルクレティアは父と夫に知らせを送る。

「夫の〈無事か〉という問いかけに対する彼女の答えは〈いいえ〉であった。〈貞節を失った女がどうして無事でいられましょう。コラティヌス、あなたの床には別の男の痕が残っているのです。でも、穢されたのは体だけ。心は潔白です。その証として私は死んでみせましょう。でもその前に、どうか右の手をさしのべて、女の敵

は許しておかぬ、と誓ってください。セクストゥス・タルクィニウスの仕業です。あの男は昨夜、客を装って敵となり、剣を帯び、力づくでその情欲を満たしたのです。それは、私にとっての身の破滅。しかしもし、あなた方が真の男なら、あの男にとっても身の破滅になることでしょう。〉 彼らは順に誓いを立てると、悲嘆に暮れるルクレティアを慰めた——咎めを受けるべきは、無理強いされたお前ではなく、下手人のほうだ。罪を犯すのは心であって、体ではない。魔が差したわけではない。お前に罪はない——。」（しかしルクレティアはその意思を変えようとはせず）「懐に隠し持っていた短剣を取り出すと、心臓めがけて突き立て、切っ先に身体を預けて息絶えた。」¹⁹⁾

ここでルクレティアは、男たちに復讐を迫るために、所有物を守らなければならないという男の名誉の観念に訴えている（「あなた方が真の男なら」）。それは、サビニの娘たちの節でも見た通りである。しかし、ここでは新たに心と身体の分離という事態が登場している。強姦によってたしかに所有者たる夫の権利は侵害されたが、それは身体だけのことで、心は相変わらずもとの所有者に帰属している、という論理が展開される。彼女が自死を選ぶのは、心が身体を抹殺することによって、身体と異なり心の所有者がもとのままであることを証明するためである。ルクレティアがローマの貞女の鑑とされることはすでに述べた。貞節とはつまり所有者への帰属性に忠実であることであり、それが変わらぬことを証明するために心が体を殺す必要があったのだ。ここで何より悲劇的なのは、ルクレティアの「意思」なるものが所有関係への忠誠であり、その表明のためには彼女の身体が毀損される必要があった、ということである。

ルキウス・タルクィニウスは「力以外に王たる権利を担保するものを持た」ない王、伝統的な意味では正統性のない王であった。しかし、逆に言えば彼は力は持っていた。その王を倒すためには「力」以外の何らかの正統性に訴える必要がある。サビニの娘たちの物語は、暴力が支配する世界から法が支配する世界への移行に関する話であった。今また、王国が力によって支配される時、共和制というまったく異なる秩序へ移行するきっかけとしてルクレティアの犠牲が必要とされた。彼女は力によって破壊されることのない秩序が存在するということを証明するためにみずからを抹殺する。そして、その不変の秩序とは、すなわち彼女（の心）がもとの所有者に変わることなく帰属している、という意味なのである。

彼女の心はそのために発生した。意思の源としての心が女に備わり、心と身体という二重性をもった存在となるのは、男たちに対して、力によって左右されることのない秩序が存在することを証明するためである。所有関係の対象となるのは基本的に身体である。所有関係が安定している限り女性の心が問題にされることはない。おそらく女性が心をもつかどうか問題にされない。所有関係が危機に瀕する時にのみ女の心が、女の

意思がクローズアップされる。

このような言い方が許されるとすれば、男にとって女性の「心」はrapeによって生まれるのだ。所有物としての女性が、rapeを契機として所有ないし略奪が可能なもの(身体)と不可能なもの(心)に分割される。ただし、その時に生まれる心とは所有者への忠誠を内容とするものであり、その心が何を感じ考えたかは問題にされない。rapeにおいて被害者の体験に焦点があてられるようになるのは、女性が所有関係を脱した時代や社会において初めて可能になることだからである。

rapeによって心が体から分離され、男たちは「咎めを受けるべきは、無理強いされたお前ではなく、下手人のほうだ。罪を犯すのは心であって、体ではない。魔が差したわけではない。お前に罪はない」と言う。それは男たちの言葉にさからい女の心に身体を殺させるためである。女はあくまでも自発的に死ななければならない。女はrapeを生き延びても殺されても他人によって奪われたままだ。その自発的な死によってのみ所有関係の回復が購われる。さらに身体の消滅によってrape(強姦であれ略奪であれ)が反復される可能性は消滅し、所有関係は最終的に安定する。女が男への愛に殉じて死を選ぶという男性たちにおおいに好まれてきた自己犠牲のファンタジーは、所有に執着するがゆえに女の死を欲する男たちの欲望に由来する。永遠の愛とは永遠の所有関係のことである。

いま一度、ルクレティアの物語に戻ろう。ルクレティアはあくまでもセクストゥス・タルクィニウスへの復讐(「あなた方は、あの男にふさわしい罰を考えてくださればよいのです」²⁰⁾)を求めたに過ぎない。それがなぜ王政の転覆につながるようになったのか。それは夫コラティヌスの友人ブルトゥスによるところが大きい。

「彼らが悲嘆にくれているうちに、ブルトゥスはルクレティアの傷口から短剣を抜き取り、まだ血の滴るその短剣を目の前に掲げてこう言った。〈王家の息子によって人倫にもとる行為がなされる以前、限りなく貞潔であったこの血にかけて、私は誓う。そして、神々よ、私はあなた方を証人にして誓う。私は、ルキウス・タルクィニウス・スペルブス、その邪悪な妻、そしてその血を引くすべての子どもたちに報復を加える。殺戮であれ、焼き討ちであれ、私にできる手だてがあれば、厭いはしない。また、あの者たちだけでなく、誰であろうとも、この後、ローマで王座に就くことは許さない。〉 こう言って、彼は短剣をまずコラティヌスに渡し、続いてルクレティウス、ウァレリウスと手渡していった。ブルトゥスの胸のうちに宿った思いもよらぬ気概はいったいどこからきたものか、彼らはいぶかしく思いつつ、同じ誓いを繰り返した。」²¹⁾

クライストが描いたミラボーの決定的反抗と同じく、ここには革命の瞬間の力学が描か

れている。ブルトゥスがルクレティアの陵辱を倫理的次元から政治的次元へ、個人的悲劇を公共の関心事へと変換した。だが、居合わせた者たちが「いぶかしく思いつつ」とあるように、ブルトゥスの論理には大きな飛躍がある。復讐の対象を、犯人とその親族から王制一般にまで拡大するのに必要な媒介の論理が欠けているのである（「また、あの者たちだけでなく、誰であろうとも、この後、ローマで王座に就くことは許さない」）。それゆえに、彼は、犠牲者の血に濡れた短剣を受け渡ししながら神々に誓うという儀式でその欠を補わねばならなかった。その結果、夫と父、そして友人の「悲嘆は憤激にかわり、王政の打倒を叫ぶブルトゥスに従うこととなった」。そして遺体は公共広場へと移され（私的事件から公の出来事への変換）、ブルトゥスがタルクィニウス王の非を鳴らす演説をし、民衆が王族の国外追放を決議するに至るのである。

だが、この時のブルトゥスの演説の論理が果たしてどのようなものであったのか、リウイウスの記述から知ることはできない。いったい何が、ひとりの女性の陵辱を政治的出来事へと、個人の悲劇を公共の事件へと変換することを可能にするのだろうか。

その手懸かりを得るためにルクレティアの陵辱を題材にしたシェークスピアの長大な詩『ルークリースの陵辱』を見ることにしたい。

言うまでもなくこの作品はリウイウスのものとは時代も言語もまったく異なる。シェークスピアはローマ史から題材をとって多くの作品を書いたが、それらは歴史書でも政治論でもない。彼の作品を読んでもローマ史について何かが分かるわけではない。しかし、われわれは「ルクレティアの陵辱」という出来事を歴史的に分析しているのではなく、男たちの歴史がこの出来事をどのように構成し、どのように歴史に嵌め込み利用したのか、という点に関心を集中している。言うなれば、このエピソードを語るディスカールの仕掛けを問題にしているのである。だから、この同じ題材がシェークスピアのディスカールにおいてどのように扱われているのかを見るのは無駄ではないだろう。これから見るように、そこではrapeという個人的悲劇を政治的事件へと変換する論理の一端がうかがえる。男たちの欲望の中に存在する性的想像力と政治的想像力の結節点が見えてくるのだ。

まず、シェークスピアの詩がリウイウスの物語と異なる点を確認しておきたい。

詩の前半、陵辱へ向かう過程でルークリース（ルクレティア）に対する欲望に懊悩するタークイン（タルクィニウス）の心情が言葉を費やして描写される。王者的人物がみずからの欲望に駆られ破滅に向かって進んでいくというのはその後のシェークスピアの作品にしばしば登場するプロットであるが、そのプロットには彼の欲望を焚きつけ操る女性が登場する。貞女の鑑であるはずのルクレティアがマクベス夫人と同様、タークインの

眼には、抗いがたい魅力によって彼を破滅へと誘惑する女ルークリースとして映っている。

もうひとつのより重大な相違点はトロイ落城を描いた絵である。すべてが終わりタークインが立ち去った後、ルークリースは壁にかかった絵を眺めるのだが、その絵にはトロイ戦争のエピソードが描かれている。²²⁾ トロイ戦争への言及はリウイウスにはまったく存在しないもので、シェークスピアによる大きな改変である。その絵の中に描かれた人々のなかにシノンがいた。

ついに彼女は、惨めな、縛められた一人の男の姿を見る。
そのありさまはフリジアの羊飼いたちにも憐れみの心を抱かしめる。
その顔は憂いに満ちてはいたけれど、落ち着きをも示していた。
素朴な羊飼いたちと連れだって、彼はトロイへ向って歩いていく。
……

だが、この男は生れながらの、心底からの悪党にふさわしく、
うわべはまったく正しい者のごとく装い、
ひそかな野心をうちに押し隠していた。
猜疑の心そのものでさえ、疑いを抱くことはできなかつたろう、
ひそかに動きまわる狡猾な知恵と偽証とが、
これほど明るい日の中に黒い顔の嵐をおしこみ、
聖者のようなこの姿を地獄に生れた罪で汚していたとは。²³⁾

この縛められた男シノン (sinon) は、木馬を城内に運び込ませるためあえて捕虜となったのである。首尾良くトロイ城内に入り込んだ彼は巧みな嘘によってトロイ落城のきっかけを作ることになる。そのシノンの顔がルークリースにはタークインの顔に重なってみえた。

「信じられない」と彼女は言った、「あれほど欺瞞に満ちた心が」——
彼女は言葉を続けるつもりだった——「あのような面差の中に潜みうるとは」と。
だが、そのとき、彼女の心にタークインの姿が浮かんだ。²⁴⁾

もしルークリースがタークインはシノンにあたると考えているならば、彼女自身は自分をトロイの城と考えていることになるだろう。

ここに描かれた狡猾なシノンのように、
真面目な物腰で、疲れ果てて、穏やかに——

悲しみと苦痛のために弱り果てたかのように——
偽善の鎧に身を固めたタークインが私のもとにやってきたのだから。
外面には実直を装いながら、内なる心は
罪に汚れたあの男が。プライアムが彼をもてなしたように、
私はタークインをもてなした——そして、私のトロイは滅びたのだ。²⁵⁾

女性の身体を城と同一視するというこの隠喩はこの詩全体を支配していると言える。
たとえば、強姦の場面は攻城戦に喩えられる。

心臓は太鼓を打ち鳴らして、燃える目を励まし、
目は手に進軍の指揮をゆだねる。
手はこのような権威を勝ち得て気負いたち、
欲情に湯気だちながら進んでゆく、彼女のあわれな胸の上に、
彼女の領土の中心に、橋頭堡を造ろうとして。
彼の手がよじ登ると、青い静脈の戦列は
色を失い、二つの円形小塔を見捨てて逃げ失せる。
……

彼の手はなおも彼女の胸におかれたまま——
それは象牙の城壁を打ち砕こうとする荒々しい破城槌だ——
心臓が、この哀れな市民が、驚きとまどい、
死ぬほどおのれを傷つけ、高く低く鼓動するのを感じた。
心臓が彼女の体を打ち叩き、彼の手はそれとともに震えた。
だがそれは彼の心に憐れみをもたらずどころか、かえって激情を惹き起し、
城壁を破って、この美しい都市に侵入しようとさせるだけだ。²⁶⁾

この城攻め、すなわち強姦にあたってタークインが展開する論理は次のようなものである。

彼女は激しい嘆願の言葉とともに問いただす、
どんな口実のもとにこのような邪悪を行なうのか、と。
彼は答える、「そなたの顔の色香のせいだ。
百合をも怒りのあまり蒼ざめさせ、
赤い薔薇をも恥じて顔赤らめさせるその顔いろが、
おれの弁護をしてくれる、おれの恋の物語を語ってくれる。
その色を軍旗として、おれはそなたの不落の要塞に

よじのぼる。罪はそなたにある。

その目がそなたをおれに売り渡すのだからな。²⁷⁾

詩の冒頭で、ルークリースの美は赤い薔薇、徳は白い百合に喩えられている（「この百合と薔薇の静かな戦いを / ターキンは彼女の美しい顔の戦場に見た」²⁸⁾）。強姦が城の攻略であるとする、城はその防備 = 貞節（白い百合）によってその宝 = 美（赤いバラ）を守っているのだが、城が攻められるのはまさにその裡に宝を蔵しているがゆえである。つまり、攻撃の原因は攻められる側にある。

もしそなたが非難するなら、おれはこう言い抜けよう。

その美しさがそなたを罠にかけ、今夜の仕儀に至らせたのだと。²⁹⁾

赤い薔薇 (= 美) と白い百合 (= 貞節)、このふたつの価値は異なったシステムに属している。前者は力によって女を獲得する時代に、貞節は法によって女を分配する時代に重要な価値である。リウイウスに関する部分で見たように、貞節は王の息子によって破壊された所有の秩序を再建するために大きな役割を果たした。そして、王の息子の欲望に火をつけたのは、シェークスピアが言うところの赤い薔薇、すなわち男たちの欲望を刺激する女性の魅力である。もし所有関係が暴力のみによって制御されるヘラクレスの時代であったなら、女性に白い百合が期待されることはなかっただろう。男たちは赤い薔薇に惑わされるままに女性たちの争奪戦を繰り広げ、そこには「本来の」「正当な」所有者など存在しないのだから、貞節、すなわち所有者への帰属性に対する忠誠など存在しようにない。

トロイ戦争の原因はある女性の略奪であったとされる。スパルタ王の後、絶世の美女ヘレネはトロイの王子パリスに誘惑されトロイに連れてこられた。パリスが戦死するとその兄弟デイフォボスの妻となり、トロイ落城の後にはスパルタ王のもとに戻り、最後は楽園で不死の生を得た。多くの男たちの欲望の的となり、多くの男たちの死の原因となり、略奪され再略奪されたこの女性に誰も貞節など期待はしない。それでも彼女は永遠の幸福を与えられたのだ。

シェークスピアにおいて陵辱の罪を犯すターキンは汚名をおそれつつも、ルクレティアの魅力の虜となり、おのれの欲望に抗うことができずに煩悶する。そして、自分（の父）の王国で満足せず、ついにもうひとつの城（他人の妻）を奪おうとして破滅する。他国の城を攻め落とし、略奪することは、王としては罪でなくむしろ務めであった。そしてその点で父王タルクィニウスは王として劣っていたとは言えない。国相互の間にはいまだに力による闘争が存在した。しかしながら法が支配する王国内部において他人の妻を奪うのは罪であった。ターキンは、非同時代的なふたつの価値の間で苦悩する人物

として描かれている。

だが、ルークリースが自分の陵辱とトロイの落城を重ね合わせることは、よく考えてみると不思議な点がある。

先に述べたように、トロイ戦争の原因はトロイの王子パリスがスパルタの王妃ヘレネを略奪＝陵辱 (rape) してトロイに連れ帰ったことだから、その場合タークインはパリスでトロイの側に、ルークリースは略奪＝陵辱された女ヘレネでギリシア方にあたる。ところが、そのタークインがシノンというギリシア方の人物としてルークリースという城を略奪＝陵辱するということは、ルークリースがトロイの城として落城することを意味する(「そして、私のトロイは滅びたのだ」)。その後、タークインの攻撃に対してブルトゥスたちが反撃し(古代ギリシャ軍にあたる)、タークインの(父の)王国が崩壊する(再びトロイの落城)。つまり、トロイ落城との重ね合わせでは、ルークリースの身体とタークインの(父の)王国のどちらもがトロイの城と同等なのだ。

トロイ戦争ではヘレネの身体とトロイの城との等価性ははっきりとは見えない。ヘレネを奪われたギリシア側が彼女を奪い返しトロイを滅ぼすのは、ヘラクレスがカクスから盗まれた羊を奪い返し彼を殴り殺すのと同じ力の論理の範囲内で理解できる。だが、ルークリースの陵辱においては、ルークリースの身体とタークインの王国の等価性がはっきりする。タークインがルークリースを陵辱することとブルトゥスがタルクイニウスの王国を攻撃することの間には対称性が存在し、同じ象徴的意味を持つ。ブルトゥスの弁論になんかの論理をもたらすとすれば、それは女性身体と王国との象徴的等価性を利用した論理であっただろう。タルクイニウスによるルクレティアの陵辱というメタフォリカルな城攻めに対して、ブルトゥスは王制への攻撃というリアルな城攻めで応えた。ブルトゥスは象徴的次元で、力で奪われたものは力で奪い返すという古代の論理を甦らせ革命のために利用したのである。女性の身体と城を同一視するということは、女性の身体と城の陵辱と国の支配権の奪取を同一視し、女性と国家が同じ所有の準拠枠の中で把握され同じ語彙で語られる(所有、攻撃、略奪、破壊、喪失等々)ということである。暗黙のうちにそのような前提があるからこそ、あるひとりの女性の陵辱をひとつの政治的出来事へと変換することが可能になる。

女性の所有を法によって制御することが共同体の基礎にあるとすれば、タークインが王国内の他人の妻を奪うということは王国の基礎を破壊するのと同然の行為である。女を奪うことは国を奪うことに等しい。つまり、ここでふたつの共同体が女性の所有をめぐる戦争状態に突入し、古代の力の論理が蘇る。ただし、ここで争っているのは同時に存在するふたつの共同体ではなく、すでに存在する古い共同体(王国)といまだ存在せぬ新しい共同体(共和国)である。タークインは男たちの同盟に背き、共同体の外部に排除した争いを再び内部に持ち込むことによって、王国をふたつの共同体に分割してしまった。古い共同体は邪悪な王を戴く不法な共同体となり、新たな共同体が正統性を主張し

つつ(陵辱された)胎内から生まれ出る。革命とは、女性の陵辱が王国内にもたらした裂け目から新しい共同体が生じる時の瞬間的な闘争状態なのだ。それは女性の犠牲によって贖われるのである。

このように、法による女性の分配と貞節による所有者への忠誠のシステムでは、女性をめぐる暴力の問題は解決しない。それだけでは、結局、女性是个々の男性ではなく共同体の所有に帰したに過ぎないからだ。共同体同士が女性の所有をめぐって争い、そのたびに女性が犠牲となる構造は変わることがない。³⁰⁾

注

- 1) Vgl. 'Ueber Anmuth und Würde' in: *Schillers Werke. Nationalausgabe*, 20.Bd., 1.Teil, hrsg. v. Benno von Wiese, Weimar, 1962, S. 287 f.
- 2) リウイウス『ローマ建国以来の歴史 1』岩谷智訳、京都大学学術出版会、2008年、25頁以下。(Livy I, transl. by B. O. Foster, Harvard University Press, 1919, p. 33.)
- 3) 同上、28頁(pp. 38f.)。
- 4) 同上、35頁以下(pp. 47f.)。
- 5) 同上、36頁(p. 49f.)。
- 6) オウィディウス『祭暦』高橋宏幸訳、国文社、1994年、106頁以下。(Ovid's Fasti, transl. by Sir James George Frazer, Harvard University Press, 1931, pp. 135 f.)
- 7) リウイウス『ローマ建国以来の歴史 1』20頁参照(cf. p. 27f.)。
- 8) R・M・キーピング『親族集団と社会構造』小川正恭他訳、未来社、1982年、66頁以下(Roger M. Keesing, *Kin Groups and Social Structure*, Holt, Rinehart and Winston, 1975, p. 35)。リネージとは「はっきりとわかった祖先から成員が出自をたどり、その祖先との系譜のつながりかたがわかっている」(同書61頁, *ibid.* p. 31)単系出自集団のこと。
- 9) 同上、80頁(*ibid.* pp. 42f.)。
- 10) ジョルジュ・ヴィガレロ『強姦の歴史』藤田真利子訳、作品社、1999年、72頁以下。
- 11) 松井健『西南アジアの砂漠文化』第一〇章「インド北西辺境における性愛のテーマ」、人文書院、2011年、420頁以下。
- 12) アリストファネスの『女の平和(Lysistrata)』をはじめとして女が男たちの戦いを止めるというモチーフは広く見られる。前注の松井論文には、まさにサビニの娘たちを連想させるバルーチュ人の生活規範「戦っている2集団の間に、女が頭に『コーラン』を載せて割って入ったら、戦いをやめる」が紹介されている(同上、418頁)。
- 13) Johann Gottfried Herder, *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*, hrsg. v. Martin Bollacher, Frankfurt a.M., 1989, S. 318 ff.
- 14) 「力以外に王たる権利を担保するものを持たなかった」リウイウス『ローマ建国以来の歴史 1』105頁(p. 173)。
- 15) Heinrich von Kleist, *Sämtliche Werke und Briefe*, 2.Bd., hrsg. v. Helmut Sembdner, München, 1983, S. 320 f.
- 16) リウイウス『ローマ建国以来の歴史 1』120頁(p. 201)。
- 17) Melissa M. Matthes は共和制への移行を、家父長的専制に対して男性たちが友愛関係に基づいて起こした反抗と解釈している。だが、それもまたルクレティアの死をきっかけとして共和的論理へと変換されたのだろう。cf. Melissa M. Matthes, *The Rape of Lucretia and the*

Founding of Republics, The Pennsylvania State University Press, 2000, p. 29 ff.

- 18) リウイウス『ローマ建国以来の歴史 1』120 頁以下 (p. 201)。
- 19) 同上、122 頁 (p. 203)。
- 20) 同上。
- 21) 同上、122 頁以下 (p. 205)。
- 22) シェイクスピア「ルークリース」高松雄一訳、世界古典文学全集第 46 巻『シェイクスピア VI』筑摩書房、昭和 41 年、400 頁以下 (*The New Cambridge Shakespeare, The Poems, Updated edition*, ed. By John Roe, 2006, pp. 216f.)。
- 23) 同上、402 頁以下 (p. 222f.)。
- 24) 同上、403 頁 (p. 224)。
- 25) 同上。
- 26) 同上、381 頁以下 (p.173 f.)。
- 27) 同上、382 頁以下 (p. 175)。
- 28) 同上、374 頁 (p. 155)。
- 29) 同上、382 頁 (p. 175)。
- 30) 女性をめぐる共同体同士の争いに関して、2013 年夏学期におこなった私の講義の課題として提出された文科 3 類 2 年 (当時) 大竹翔太君のレポートに大いに触発されたことを記しておきます。